

正量部の四善根位説

並 川 孝 儀

チベット訳のみに現存する Daśabalaśrimitra 作 'dus byas dang 'dus ma byas rnam par nges pa (Saṃskṛtāsaṃskṛta-viniścaya, 『有為無為決択』, 以下, SAV と記す)¹⁾は, 全35章の中第16章から第21章においてその全容が殆ど知られなかった正量部の思想—煩惱論, 業論, 聖諦論—を数多く伝えており, 部派仏教研究に貴重な資料を提供する²⁾。

その中, SAV・第21章「聖諦決択」には, その導入部と末尾の煩惱論³⁾を除き, 大半は『俱舍論』第6章「賢聖品」に対応する内容を有する。その内容の概略は既に公にした⁴⁾ので, 本小論では特に無漏道に入る前の四善根位に関してその正量部説を眺める。この正量部説は, 『異部宗輪論』⁵⁾とその註疏である『異部宗輪論述記』に紹介される犢子部の四善根位説⁶⁾—忍・名・相・世第一法—と同じであるが, その内容の詳細が不明だっただけに解明に当たってこの点が詳論されている SAV の意義は大きい。

1. 忍 (bzod pa, kṣānti) と四諦の観察

SAV 第21章の冒頭部分で福・非福・不動業の三業と苦楽の生起, そしてその原因である煩惱と随眠に関する記述があり, それに続いて随眠の減尽が説かれる。随眠が減尽する原因は根 (dbang po) などに依るが, その手段と方法は清浄な見と戒を具足することであり, それには四諦の領受 (nye bar spyod pa) と四種の忍 (bzod pa) が修習されるべきであると, 先ず四諦を観察する忍の修習が説かれる。それを修習するのに先ず蘊門などから入ると, 次のように規定される。

「[修行者が] 諦現観に入る門は四[種]である。即ち次の如くである。蘊門と処門と界門と名色門である。門とは最勝 (gtso bo) という意味である。」

(D. 227b4-5, P. 157b4-6)

ここで, 蘊とは五蘊であり, 五根と五境が色蘊で, 楽と苦と不苦不楽の受が受蘊で, 差別 (khyad par) の行相 (rnam pa) を個々に能取する ('dzin pa) 自性をもつ法 (bdag nyid can chos) が想蘊で, 思 (sems pa) などの法が行蘊で, 眼識などが識蘊である。六根と六境が十二処である。六根と六境と六識が十八界であ

る。名色は、名が識や受などの百七十九法で、色が有見 (bstan du yod pa) と無見 (bstan du med pa) である、と説かれる。

では、どのような場合に蘊門などの諸門から入るのかについては、次のように規定される。

「貪の行為者は、大抵の場合苦についての怖畏によって蘊門から入るのである。瞋の行為者は、大抵の場合雑染についての怖畏によって処門から入るのである。これによって先ず雑染となった者は処門から忍が修習されるのである。〔貪と瞋の〕等分 (cha mnyam pa) の行為者は大抵の場合苦と雑染についての怖畏によって界門から入るのである。この故に、それによって先ず苦と雑染となった者は界門から忍が修習されるのである。癡 (gti mug) の行為者は名色門から〔入り〕先ず忍を修習するのである。癡の行為は、愚かさ (rmongs pa) 〔と〕少しの増上心と劣根となるものである。〔名色門から入り忍を修習すること〕はおおよそ名色と言われるもの〔すべて〕を捨離することと、驚怖がなくなり、愚かでなくなることである。広大な心と根が最後身の菩薩は極めて甚深なるを保持しつつ、遠離 ('bral bar 'byung ba) 門から入り、忍を努めて修習するのである。」 (D. 228 a4-b1, P. 158a7-b4)

このように修行者の在り方によって諸門から入り、忍を修習するわけであるが、具体的にはどのように四諦を観察するかについては次のように規定される。

「蘊門から忍を修習する修行者は苦・集・滅諦において各々に三十一に配されるのである。

先ずともあれ修行者が生滅の具法者であるが故に、そして因の力によって安住する (rnam par gnas pa) 故に、そして未生 (ma byung ba) が生じることによってと、生が失われることによってと、微塵 (rdul phran) が積集することによってと、多くの支分を含むことによってと、生処 (skye ba gnas pa) が無常に従従する故に、〔修行者は〕色は無常と決定 (nges pa) して想うべきである。

受もまた未生が生じることによってと、〔苦・楽・不苦不楽の〕三種 (gsum nyid) を知覚すること (nye bar dmigs pa) によってと、一つを所受すること (nyams su myong ba) によってと、色など各種と境界である所縁を分別 (rnam par rtog pa) することによって生滅の具法の故に、〔修行者は受も〕無常であるということを行ずるべきである。

想は観察が困難なので (? nye bar mtshon pa dka' bas) 受の因の所縁の行相によって差別が能取されるのは、観察の故に、そして受と同一性であること (grub bde gcig pa nyid) によってである。〔想は〕受と生滅に随って結合する ('brel pa) 故に、〔修行者は想も〕無常であると修習すべきである。

それから、行 ('du byed) は心行と各々に結合することによって、心行と生滅に随って

結合することによって、そして心行が受と想以外と相応する諸行は両者と各々に結合する故に、〔修行者は〕受と想と同じく無常であるということを容易に行ずるべきである。

それから、識は受と想と行に先行して意 (yid) が働くことによって、意となるもの故にそれら〔受など〕が〔働くの〕である。識は常に無常である受などと合わないものである。それから、この識もまた受などと同じく無常であるということが自然に生じるのである。〔そして〕次に、〔修行者は〕識が無常であるということを想うべきである。

このように、これらは一々無常性であるということに喜び (dga' ba) が生じる時、また〔修行者は〕二つづつも無常であるということを修習するのである。即ち次の如くである。色・受と色・想と色・行と色・識と受・想と受・行と受・識と想・行と想・識と行・識とを無常性であると想うのである。

また、三つづつも無常と想うのである。即ち次の如くである。色・受・想と色・受・行と色・受・識と色・想・行と色・想・識と色・行・識と受・想・行と受・想・識と受・行・識と想・行・識〔とを無常性であると想うの〕である。

また、四つづつも無常性と想うのである。即ち次の如くである。色・受・想・行と色・受・想・識と色・受・行・識と色・想・行・識と受・想・行・識〔とを無常性であると想うの〕である。

また、五つも無常性と想うのである。〔即ち〕色・受・想・行・識を無常性と想うのである。

このように、その修行者は無常の意味に喜びが生じる時に、個別的〔にも〕総合的にも忍ということ説くのである。五蘊の部分に含まれるものは無常であるということに喜びが生じる時、総合から (spyi nas) 苦諦における所縁の忍であると知るべきである。

このように、苦は無常であると決定する時、続いてこの苦は何から生じるのかということが熟慮 (rnam par dpyad pa) されるべきである。そのことによってこそ、五蘊から苦が生じるのであるという決定を得ることから、集〔諦〕における個別と総合から忍が修習されるべきである。これについても三十一に配されるのである。(以下、省略す) (D. 228b 1-229a7, P. 158b4-160a1)

蘊門から入る修行者は、五蘊各々が無常であると想うことを修習するが、先ず色が無常と観察されるのは、修行者が生滅の具法者である理由から、因の力によって安住する理由から、そして未生が生じることによって、生が失われることによって、微塵が集積することによって、多くの支分を含むことによって、生処が無常に随従する理由からである。受が無常と観察されるのは、未生が生じることによって、苦・楽・不苦不楽の三種を知覚することによって、一つを所受することによって、色など各種と境界である所縁を分別することによって生滅の具法との理由からである。同様に、想は観察が困難なので(?) 受の

因の所縁の行相によって差別が能取されるのは、観察の理由からと受と同一性であることによってであり、想は受と生滅に随って結合する理由から無常と修習される。行は、心行と各々に結合することによってと、心行と生滅に随って結合することによってと、心行が受と想以外と相応する諸行は両者と各々に結合する理由から、受と想と同様に修習される。識は受と想と行に先行して意が働くことによって意となるもの故に、受などが働くのである。識は常に無常である受などと合わないが、それから識は受などと同様に無常であるということが自然に生じ、次に無常であるということを観察する。このようにして、五蘊各々が一法から五法まで個別的に合計三十一通りに観察され、そして総合的にも観察される。

苦諦と同様に、集諦、滅諦、道諦においても忍の修習が行われる。即ち、集諦では五蘊各々が苦の原因であると一法から五法まで個別的に合計三十一通りに観察し、そして総合的にも観察する。滅諦でも五蘊各々の滅（不行、不生）が涅槃の常性であると同様に観察する。道諦の場合は、色が不出離であり無漏でもない理由から道を四蘊とする時、四蘊各々が苦の滅に導く道であると個別的に十五通りの観察を行い、そして総合的にも観察される。また、五蘊各々の滅が苦の滅に導く〔出離の〕道であると個別的に三十一通りの観察を、そして更に総合的に観察するとされる。

SAV では忍の修習が以上の如く貪行者の蘊門から入る四諦の観察のみについて説かれているが、修行者の在り方によって処門、界門、名色門からも入り、各々の法を観察することをもって忍の修習であると推測することは当然である。

ところで、この SAV には説一切有部でいう四善根位（順決択分）の前段階の順解脱分に対応する記述が見られず、睡眠の滅尽に關しすぐさま忍の修習といった四善根位から入ることより判断すれば、兩部派には四善根位前における有漏道の修習階梯にも相違があったのではないかと推定できる。尚、この点に關連して説一切有部における順解脱分の別相念住・総相念住の観察の形式が正量部の四善根の忍位における四諦の観察の形式と類似している点、或いは蘊門などから如何なる修行者が入るのかという正量部の見解も有部の順解脱分の不淨觀を修習する貪行者、數息觀の尋行者との考え方と類似している点も考慮すべきである。

2. 名の想 (ming gi 'du shes, nāma-saṃjñā)

「そのように修習されるのは、その時一つの字 (yi ge) によって欲界は無常性であると能取し、偈頌をよく修習する理によってである。その境に想いをなすことが名の想 (ming gi 'du shes) である。」(D. 232b8-233a1, P. 164a7-8)

この定義の内容は、四諦の観察を經典の名字に基づいて行われる修習とするもので、これは『異部宗輪論述記発軔』に見られる犢子部説の名の定義「四諦の能詮の教法を観ず」⁷⁾と同じ意味である。

3. 相の想 (mtshan ma'i 'du shes, nimitta-saṃjñā)

「名の想とは反対に、名字を離れ欲界は無常性であると説く相 (mtshan ma) に普く生じる想いが相の想 (mtshan ma'i 'du shes) である。これは、また劣などの区別によって三〔種〕となるのである。即ち次の如くである。劣 (dman pa) の相の想と、中と勝 (khyad par can) の相の想である。また、〔それらは〕各々に劣の劣などの区別によって開かれて相の想は九の区別がある。(中略) ここに住する修行者は、最初の三からと、中の三からは時として退失すること (nyams pa) もあるのである。その後の三種の想は実に不動なるもの (mi g-yo ba) である。それ故に退失するものとはならないのである。勝の勝の想は最上の有漏法である。」(D. 233a1-4, P. 164a8-b5)

名の想と反対に、四諦の観察を經典の名字によってあらわされる相に想いをなすことによって修習することで、これは『異部宗輪論述記』の犢子部説「四諦の所詮の体を観ずるを想と名づく」⁸⁾との四諦の理体を観察という意味と同じである。相の想は劣の劣(下下品)から勝の勝(上上品)の九品に区分されているが、説一切有部では煖・頂・忍において各々下・中・上の三品に区分されており⁹⁾、また相の想における勝の劣より上位が退失することなく不動であるとするのに対し、説一切有部では忍より上位が不動であるとされ¹⁰⁾、この点でも相違する。

4. 世第一法 (chos mchog, agradharmā)

「その世第一法 (chos mchog) に隨行すること (rjes su 'gro ba) は、修習の自性と相応することと相応しないこととである。それと相応することは、善の根本 (rtsa ba) などである。しからば、何の故にここで世第一法であるのかということの説くならば、〔それについて〕説こう。即ち、すべての有漏の中においてこれが核 (snying po) となるのであり、醍醐の如くである。それによって、それ故世第一法と説くのである。(中略) それから上方において何が生起するのかと言えば、〔それについて〕説こう。即ち、その世第一法から連続して修行者が諸諦に隨入することから、欲界に属す苦〔諦〕において無漏の法智が生じるのである。」(D. 233a5-b3, P. 164b5-165a5)

世第一法が有漏の中の核との如く最勝の法であり、この法に連続して無漏の見道に入ると規定される。ただ、SAVの文脈から考察すると、勝の勝(上上品)の相の想が最上の有漏法とされ、そして「その世第一法に」と続く文脈から推察すれば勝の勝(上上品)の相の想が世第一法であると読むことができる。そうである

ならば、正量部では世第一法は相の想などと別の善根ではなく、最上の相の想を世第一法と呼称したものと推測できる。これは「上品の忍の無間に世第一法を生ず。上品の忍の如く欲の苦諦を縁じて一行相を修すること唯一刹那である。」¹¹⁾とする説一切有部説と異なるようである。

5. 説一切有部の四善根位説¹²⁾との比較

- (1) 煖・頂・忍・世第一法を説く説一切有部説と比較して、世第一法を除き大きく相違している。その世第一法の規定も両者に相違が見られる。
- (2) 説一切有部では煖・頂・忍に各々下・中・上の三品の区分がなされるが、正量部では相の想において九品に区分される。九品の区分の方法に相違は見られるが、四諦を観察する修習を九段階に分けている点は同じである。
- (3) 説一切有部では煖・頂までが退失し、忍・世第一法より不動と規定するのに対し、正量部は相の想の勝の劣（上下品）より上位を不動と規定する。
- (4) 説一切有部の四諦十六行相（苦諦—非常・苦・空・非我，集諦—因・集・生・縁，滅諦—滅・静・妙・離，道諦—道・如・行・出の観察）説に対応する説として、正量部は蘊門などから入り、各々を苦諦—無常，集諦—因，滅諦—涅槃の常性，道諦—出離と観察する見解を立てた。

6. その他の問題点

『顯識論』（真諦訳）¹³⁾において熏習の四種の方が説かれる中、四善根位が忍・名・相・世第一法と説かれ、更に相（相の想）が下品から上品との如くに説かれる¹⁴⁾ことから正量部の四善根位説と構造的に一致しているようである。但し、四諦の観察方法の内容に関しては共通していない。いずれにしても、『顯識論』が説一切有部の四善根位と対応せず、正量部説と対応していることには注目したい。

7. 纏め

- (1) 正量部の四善根位の構造は犢子部と同じであり、説一切有部と大きく異なっている。また、唯識の『顯識論』（真諦訳）に説かれるそれは正量部と構造的に一致を見る。¹⁵⁾
- (2) 蘊門・処門・界門・名色門から入り、四諦を観察する正量部説の内容は説一切有部の四諦十六行相説に対応する見解と考えられる。
- (3) 説一切有部の四善根位説は煖・頂・忍・世第一法各々を次第に上位へ進む段階と規定するのに対し、正量部では四諦を観察する忍が先ず名の想によって修習され、続いて九品の相の想が上位へと次第に修習され、その最後の段

階を世第一法と呼ぶ如く、兩派には構造的に相当の相違が認められる。

- 1) デルゲ版：(東京大学文学部所蔵版) 中観部 13 No. 3897 55-1-1 (Ha 109a1)～159-1-7(317a7), (台湾版) Vol. 36 No. 3902 324-3-5(409)～334-5-5(481)。北京版：TTP. Vol. 146 No. 5865 4-3-1 (Ño 5b1)～110-3-3(270b3)。
- 2) SAV の概要，作者，成立年代に関する詳細な研究には，P. Skilling “The Saṃskṛtāsamskṛtaviniścaya of Daśabalaśrimitra”, *Buddhist Studies Review* 4-1, pp. 3-23 があり，参照されたい。
- 3) 拙稿「正量部の煩惱説—『有為無為決択』第21章「聖諦決択」より見て—」『印度学仏教学研究』42-2, pp. (173)-(178)。
- 4) 拙稿「正量部の修行階梯—『有為無為決択』第21章「聖諦決択」より見て—」『印度学仏教学研究』43-1, pp. (121)-(126)。
- 5) 大正蔵49巻 16・c, 『十八部論』同 19・c, 『部執異論』同 21・c-22・a。
- 6) 己統蔵経(蔵経書院版) 第83冊 pp. 0459-0460。小山憲栄編撰『異部宗輪論述記発軌(下)』29。
- 7) 小山憲栄編撰『異部宗輪論述記発軌(下)』29。
- 8) 己統蔵経(蔵経書院版) 第83冊 p. 0460 上。『異部宗輪論述記発軌(下)』29 でも「所詮の四諦の理体を観ず」と同じ解釈をする。
- 9) 大正蔵29巻 119・b～c
- 10) 大正蔵29巻 120・a
- 11) 『俱舍論』大正蔵29巻 119・c
- 12) 桜部建『存在の分析〈アビダルマ〉』(仏教思想 2・角川書店) pp. 126-141, 加藤純章「阿羅漢への道—説一切有部の解脱—」『仏教思想 8・解説』(仏教思想研究会), 森章司「有部阿毘達磨仏教における四諦説(←, ⇐, ⇓)』『国訳一切経印度撰述部月報・三蔵集』第三輯, 兵藤一夫「四善根について—有部に於けるもの—」『印度学仏教学研究』38-2 等参照。
- 13) 宇井伯寿『印度哲学研究・第六』pp. 379-403, 高崎直道「真諦三蔵の訳経」『森三樹三郎博士頌寿記念・東洋学論集』pp. 1109-1125 等参照。
- 14) 大正蔵31巻 879・a-880・b。
- 15) 尚，パーリ上座部では修行道の段階を戒清浄，心清浄，見清浄など七清浄で説くが，見清浄以後の慧の修習に入る時，五蘊の無常・苦・無我，十二処，十八界，二十二根，四諦などを観察すると説く。一見類似しているようであるが，しかしこの内容は正量部説と異なる。*Visuddhimagga* (PTS) p. 587ff。

〈キーワード〉 正量部，修行階梯，四善根位(順決択分)，『有為無為決択』
(Saṃskṛtāsamskṛtaviniścaya)

(佛敎大学教授)